國學院大學学術情報リポジトリ

Naoya Kase, Shinto shrines and priests in the Heian period

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2023-02-05
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: Hayakawa, Mannen
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000183

〔書評〕

加瀬直弥著『平安時代の神社と神職』

早川万年

本書は國學院大學神道文化学部に所属する著者による第一論文集である。氏は古代神道史を専攻し、國學院大學大学院在籍中から、六国史をはじめとする基本史料を対象として、神社・祭祀関係の記載を丹念に見出していくという地道な取り組みを長きにわたって続けてこられた。そして、二十一世紀ＣＯＥプログラム「神道と日本文化の国学的研究発信の拠点形成」の推進にあたって大きな役割を果たされた。本書は、著者のそのような幅広い知見を背景に、主に平安時代における神社と神職のあり方について検討した成果を集成したものである。

以下、まず目次を掲げる。

序章　本書の刊行趣旨と構成
第一部　神社修造と神職
第一章　平安時代の神職と神社修造
第二章　古代神社の立地と神祇観
第三章　古代の社殿づくりと神宝奉献
第四章　平安時代前期における神社への神宝奉献
第五章　奈良時代の神社修造
第六章　平安時代中期の七道諸国における神社修造の実態

第七章　平安時代中期の賀茂社司
第八章　奈良時代・平安時代前期の神社と仏教組織
第二部　神社の社格と神職
第一章　平安時代の諸国における神社の社格
第二章　文徳朝・清和朝における神階奉授の意義
第三章　康和五年官宣旨に見る神祇官と地方神社
第四章　平安時代後期の神職補任
第五章　源頼朝と一宮
終章　平安時代の神職の特質と神社の展開

本書のこのような構成から明らかなように、著者は、神社を核としてその維持・管理の制度的側面、実情分析を行うとともに、中央政府から見た位置づけ、地方における歴史的推移に関心を寄せる。第一部においては、「一〇世紀および一一世紀前半における神社修造記録の一覧」（表5）を収める第六章が核となり、第二部においては、「神階奉授件数の推移図」（図4）「三位以上奉授件数の推移図」（図5）「奉授件数の推移」（表16）を載せる第二章が考察の枢要を占めると言ってよいであろう。

簡単に各章の要点を述べると、第一章は第一部の序論的な内容であり、朝廷の主要祭祀のあり方と神社の維持について概観する。第二章は、神社立地に関する一般的な見方とともに、越中国東大寺開田図の記載を取り上げる。第三章は春日祭と平野祭の祝詞から、社殿作りと神宝奉献の具体相を論じる。第四章は、前章を受けて神宝奉献をより広範囲に述べ「朝廷からの神宝奉献は、律令制度の祭儀として行われるものではなく、天皇の内々の営みに位置づけられ」るとし、神宝の品目は紡織具や武器類が主であり、これらを奉献することで神威を高めようとしたとする。第五章は、奈良時代の神社修造について宝亀八年三月官符を取り上げることから始め、朝廷・国司の関与について論じる。実際には、直接その神社に奉仕する人々が修造の中核であったとする。

第六章は、前章を踏まえて平安時代の神社修造を取り上げる。「上野国交替実録帳」の記載の検討を通じて、国司による神社修造への関与を論じ、その上で全国の例を列挙して正税支出がそれほど活発でなかったことを指摘する。そして、在地の神職層が祭祀の場の維持に重要であったとする著者の見解を裏付ける。第七章は、平安時代中期の賀茂社への神領寄進の問題を扱いながら、賀茂社のような特別の地位にある神社においても、地域社会および在地の神職と神社との結びつきが根幹に求

められたと説く。第八章は本書の中では例外的に仏教組織（主に神宮寺）との関連に注目する。宇佐や鹿島等の例を指摘しつつ、寺社の相互関連の上で神社なり神宮寺が維持されていると述べる。

第二部第一章は第二章の導入的な位置づけであって、平安前期の神階昇叙を概観するとともに「筑後国神名帳」等の実例を取り上げる。第二章では、九世紀後半における中央政府の神階授与について論じ、とくに官社制度との関連に言及する。官社制度の変化は、神階奉授にある程度反映されてはいるものの、九世紀半ばが神階社制のスタートであって、神階の選定基準は一律でなかったとする。第三章は、一宮の成立に注目しつつ、神祇官と地方神社のあり方に変化を及ぼした状況を指摘する。第四章は、『朝野群載』巻六所収の神祇官移を取り上げ、平安後期においても、神祇官は地方神社の神職補任に影響力を有していたとする。第五章は、鎌倉幕府による諸国一宮修造に着目し、一宮はそもそも国衙と密接な存在であったことが前提としてあり、また幕府からの関与を受け入れる素地が一宮側にもあったとする。終章は、文字通り本書のまとめであり、「神社という場単位に維持を担わせる、真の意味での神社制度が完成したのは平安初期」「朝廷の意識が、その中の特定の神社に強く向いていたが、文徳朝にそれを意識して神階を広く、秩序的に奉授した」「神職と総称すべき人々はこの制度のもとで、公的な性格を補強され」（二九八頁）た、と述べる。

以上、各論文の要旨を適切に示しえたか、はなはだ覚束ないが、著者はほぼ一貫して、平安時代の神祇・神社を検討するにあたって、中央政府・国司・在地神職層という三者の構造を設定し、なおかつ神職層による神社の維持こそ基盤であり、歴史的にも重要であったと説いている。

本書を概括して言えば、広範囲に及ぶ史料の渉猟に基づき、著者の穏健、着実な研究姿勢が大いに反映された著述と言えよう。議論は自らに対して抑制的であり、あくまでも史料に即した解釈を基軸とする。一方、神社という長い歴史の中で継続してきた祭祀の場に対しては、直接その維持を担当してきた在地神職層が大きな役割を果たしており、中央（朝廷）や国司からの関与は、経済的な面をはじめ儀礼・政治秩序の形成に一定の役割を果たしたものの、時期による変化もあり、基本的には外形部分にとどまると推測されているようである。

著者のこの見方に対しては賛意を表したい。

その上で、いささか注文めいて恐縮であるが、本書を読んでの感想をいくつか述べてみたい。まず気になったのは、神社・

神職をあたかも自明のこととして論じているように思われる点である。これらを観念的に捉える以前に、歴史的分析が重要であって、そのことは著者においても当然承知されているところであるが、たとえば本書に何度か登場する「神意」「神威」「信仰」も含めて、わたしには自明のものとは思われない。

これらの語を用いる際には、われわれは当然ながら経験的な感覚、知識を前提としてしまいがちである。しかしながらそれが過去の当事者あるいは表現者の意識と合致しているかどうかは別問題である。じつは本書の中心的課題である神職にしても、どれほど職業として専業化していたのか、その実態こそが問題である。少なくとも、神職とされる存在を自明のものとしてしまう前に、具体的なあり方がより一層検証される必要があるのではないか。また。本書の範囲に限ってみれば、これまでの古代史研究の中で、神社・神職を論じた成果を著者が総合的にどう把握するのかは十分に述べられていない。これらを合わせて言えば、本書の課題である古代の神社と神職について、従来の研究史を検証しつつ、その対象を分析的に論述する一章が設けられたならば、一連の考察の意義も、より明確になったと思われる。

とはいえ、本書の注記を見ると、多くの論著が参照されており、関係史料とともに先行研究にもかなり行き届いた目配りがなされていることが窺われる。とすれば、著者はあえてこのたびの著作では史料の網羅的考察を先行させ、個々の事象に即して研究史に触れるにとどめたのかもしれない。であったとすれば、今後は研究史の理解や批判も含め、著者なりの論説の一層の展開が期待される。是非とも著者の視点をさらに掘り下げ、地域住民にとっての神祭の意義を柔軟に追求していただきたいと思う。

もちろん、中央政府・朝廷との関わりはたしかに大きな問題で、史料的にもそれが表れるのが通例である。しかし著者が指摘されるとおり、住民と密接な「神職」の存在こそ重要である。であればこそ、それがいったいいかなる人々であったのか、社会的にどのような役割を果たしたのか、より踏み込んだ考察が求められるところであろう。

著者の着実な研究成果が一書にまとめられたことを喜ぶとともに、この方面の研究がさらに進展することを期待したい。

（A５判、三〇〇頁、吉川弘文館、二〇一五年三月発行、定価一〇〇〇〇円＋税）